



消防学校 ニュース



令和 4 年 3 月号

救急科(第 31 期)

即戦力となる救急隊員を目指して

コロナ禍での教育体制

リモート教育準備

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るうなか、救急科(第 31 期)の準備を始めました。今年度の救急科は初任科より学生数が多く、通常の教育体制ではクラスターが発生した場合に教育訓練が中止となるのが危惧されました。救急科は救急隊員の資格取得教育訓練課程であり、県内の病院前救急医療体制の安定した継続のためにも、新規救急隊員養成は確実に行わなければなりません。

そこで、カリキュラムの一部を本校初となる分散受講方式にすることにしました。約 2 か月間の教育期間前半を全て座学とし、後半に実習や訓練を集中させるカリキュラムにしました。座学は各消防本部(局)からリモート受講をすることによって入寮期間を短縮し、少しでも感染リスクを軽減させつつ、万が一クラスターが発生した場合においても全体への影響を最小限とする考えです。

カリキュラムの企画立案と並行して、リモート講義環境の整備も行いました。ハード面では、高速で安定した Wi-Fi 環境整備、高速通信と処理が可能なパソコンの確保、本校大教室で受講をする学生がいる場合の音声ハウリング問題(講師の音声と教室で発言した学生の音声が同一スピーカーから出力されるため)、複数台カメラによる同時配信等が課題となりました。ソフト面では、ビデオ会議用ソフトウェアの選定、スマートフォンを活用した学生状況把握システムの構築、ICT による事前学習や補講の実施等が課題となりました。

ハードとソフト両方の課題は、操作性とコストパフォーマンスも考慮しなければなりません。ビデオ会議用ソフトウェアの選定一つにおいても、世界中に何十種類もあるソフトウェア、アプリケーション、ビデオ会議サービスから安全性、知名度、操作性、動画安定性、プレゼンテーション機能、OS による制限、コストパフォーマンス、インストールの有無等を調査しなければなりませんでした。

リモート環境整備と入校準備

救急科スタート！ 前例のないカリキュラム開始

本校のリモート講義環境を整え、各消防本部(局)の協力もあり救急科(第 31 期)がスタートできました。所属にリモート受講環境がない 50 人の学生は入校し、残りの 78 人の学生は県内各消防本部、消防署からリモート受講をする前例のない救急科が始まりました。



128 人の学生には体調管理の徹底を指示していましたが、入校した学生の中に新型コロナウイルス罹患者がおり、第 1 週目でクラスター発生となってしまいました。入校していた 50 人の学生は、第 2 週目以降は自宅からのリモート受講に切り替え、救急科のカリキュラムは変更することなく継続できました。当初、128 人が入校して実施する予定だった実習と訓練は、集合研修の感染リスクを考慮して、消防学校での実施は取りやめ所属研修としました。実習資料や指導要領等は消防学校で作成しましたが、各所属の教育支援があったからこそ実現できたと思います。



次ページ 講義・実習風景！



リモート講義スタジオ



リモート講義



新生児蘇生法



心肺蘇生法基本手技訓練①



全身固定手技訓練



リモート受講



心肺蘇生法基本手技訓練②



骨盤固定器具取扱訓練



特定行為補助訓練



搬送資器材取扱訓練



救急車同乗実習



救急車内資器材取扱訓練

（担当教官から）

今年度の救急科は完全リモート講義となり、実習や訓練も所属での研修となりました。第31期の同期128人が、一度も消防学校で揃うことなく終了してしまいました。コロナ禍時代と言えば簡単ですが、担当教官としては寂しい限りです。リモート教育は確かに便利ではありますが、「消防職員教育」は一般教育と違い特殊な部分も多くあります。集団生活による協調性の育成、規律教育、同期との固い絆等はリモート教育では難しい部分になります。今後学生は、火災の炎ではなく傷病者を扱う業務に就きます。人を扱う業務の教育は、やはり対人教育に軍配が上がるのではないのでしょうか。しかし、救急科が無事に終了できたのはICT技術があったからこそであり、これからの時代に必要不可欠なツールでもあります。このツールを上手く使い分け、質の高い教育を提供し続けたいと思います。モニター越しの教え子128人が元気に活躍し、多くの命を救うことを期待します！

教務課主査 田島 貴俊（富士市消防本部から派遣）